

創刊記念「争論・協同を語る」(第1回)

## 震災からの復興に協同組合は有効なのか ～東北の漁協をめぐって

『協う』をモデルチェンジした『くらしと協同』の創刊に伴い、編集部ではいくつか新企画を準備した。そのひとつが、この「争論「協同」を語る」のコーナーである。

競争原理だけでは「くらし」を守り、発展させることは出来ないという思いから、『くらしと協同』では今後さまざまな「協同」の営みを発掘し、紹介したいと考えているが、「協同」を大切なものとして考える人々のなかでも、「協同」に寄せる思いや期待は様々ではないだろう。自発的なものであるか、それとも強制されたものであるかは議論があるだろうが、現代社会において、人々の境遇、立場、ニーズ、願い、期待、怒りは著しく多様化している。この「争論」では、そうした多様な「協同」への思いを、複数の論者に語っていただこうと考えた。

創刊記念の第1回は、「東日本大震災からの復旧と復興に協同組合がいかに役立っているのか」を考えるために、漁業協同組合に対する見解が対照的なお二人に登場していただく。

おひとりには、かつてテレビ朝日系列のニュースステーションの解説者としても活躍された高成田享氏。高成田さんとはかねてから協同組合運動に期待を寄せられ、ご家族にも協同組合関係者がいらっしゃるといふ、マスコミ界では稀有な存在であったが、現在

は新聞社を退職され、東北の地で教鞭を執られるとともに、市民運動にも携わられている。

もうおひとりは、漁業や漁協問題の専門家として学界のみならずマスコミでも現在大活躍されている濱田武士氏。協同組合研究のなかでも、生協や農協とは違って、漁業協同組合は比較的マイナーな存在だったが、震災による漁業と漁村の壊滅状態と、その復興のための「特区」構想が語られるなかで、しばしば協同組合を無視した議論が横行したことから、一気に漁協への注目が高まった。そこで孤軍奮闘されているのが濱田さんである。

話題の中心は漁業協同組合であるが、もちろん生協も、同じ協同組合として復興の先頭に立つべき存在である。お二人の漁協への批判や期待を、読者はどう受け止めるだろうか。

〔杉本貴志 (関西大学商学部教授)〕

